

Arthuriana Japonica: Newsletter No. 36

November 2023

国際アーサー王学会日本支部会報 Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

目次

I. 2022年度年次大会報告	1	開会の言葉	支部長 小路 邦子
年次大会プログラム	1	司会： 嶋崎 陽一（龍谷大学）	
総会議事録	2	研究発表	
研究発表要旨	3	モルガーヌからマドワーヌへ	
シンポジウム要旨	3	—『クラリスとラリス』における妖精像—	
II. 電子化について	6	渡邊 浩司（中央大学）	
III. 学会メーリングリストについて	6		
IV. 会計からのお願い	6	シンポジウム	
V. 学会サイトについて	6	宮廷騎士文学の遊戯性の諸相	
VI. 第37回年次大会について	7	—恋愛奉仕のパロディー化を中心に—	
VII. 研究発表・シンポジウム企画募集	7		
VIII. 会員名簿に関するお願い	7	はじめに	渡邊 徳明（日本大学）
IX. 天沢退二郎先生追悼	7	1. 『ヴィガロイス』における女性像	
X. 文献情報	8	—古典期のアーサー王作品とその後継作品の比較	
英文学	8	松原 文（立教大学）	
独文学	9	2. Tageliedのパロディーに見られる作者性	
北欧文学	9	—Wolfram以降のミンネザングを中心に—	
仏文学	9	伊藤 亮平（松山大学）	
中世ラテン・イタリア文学・その他	12	3. パストゥレルにおける人間性と動物性	
		高名 康文（成城大学）	
		4. 『ニーバルンゲンの歌』から『ヴォルムスの薔薇園』へ—クリエムヒルト像の変遷について—	
		渡邊 徳明（日本大学）	
		5. ヴィッテンヴィーラー『指輪』における農民と騎士	
		嶋崎 啓（東北大学）	
		質疑応答	
		*会員研究動向・情報交換フォーラム（16:45～）	
		*支部総会（17:00～）	

I. 2022年度年次大会報告

日本支部の2022年度年次大会は、下記の通り開催されました。ご参加いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

[日時] 2022年12月10日（土）13:00より

[場所] オンライン（Zoom）

[大会費] なし

[懇親会] なし

年次大会プログラム

*開場（12:30）

今回も会員のみ参加可といたしました。多くの方にご出席いただきました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

(文責：松原 文)

総会議事録

* 報告事項

(1) 2022年度の活動について

コロナウィルスの影響によりオンラインの大会が二年度続きましたが、今年は久しぶりの対面での開催が叶い、Zoomとのハイブリッド形式で実施されました。

(2) 書誌活動報告

日本支部における業績は、2022年度も充実したものとなりました。毎年夏に業績報告をお願いしていますが、今後も一層のご協力をお願いいたします。また、非会員の業績も掲載可能ですので、積極的に情報をお寄せください。

(3) 学会サイト「アーサー王伝説解説」について
複数の記事の作成が進行中で今後掲載予定です。

(4) 本部の書誌データベース

書誌データベース (BIAS) のオンライン化が現在進められています。

* 審議事項

(1) 2022年度決算報告 (2021年12月1日～2022年11月30日)

会計担当幹事の田中ちよ子先生より会計収支決算が作成され、報告されました。

収入

項目	収入額
年会費 (71 件)	213,000
寄付金 (0 件)	0
入会金 (2 件)	6,000
賛助会員費	0
小計 1	219,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費	0
懇親会費	0
小計 2	0
2019 年度からの繰越金	1,147,303

普通預金口座利子	4
総計	1,366,307

支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	502,558
ホームページ関連費用	7,304
事務用品代・雑費	3,742
通信費(含振込手数料)	9,828
小計	523,432
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	0
懇親会費用	0
小計	0
2021 年度への繰越金	842,875
総計	1,366,307

(2) 2023年度予算案提出 (2022年12月1日～2023年11月30日)

続いて2023年度予算案が提出され、会員の承認を受けました。(学会誌刊行・発送費が例年の2倍となっているのは、支払い手続きが滞っていた2019年度分が合わせて計上されたため。)

収入

項目	収入額
年会費(会員数 80 名@3,000 円)	240,000
寄付金	0
入会金	0
賛助会員費	20,000
小計 1	260,000
【支部大会関連収入】	
大会参加費	0
懇親会費	0
小計 2	0
2020 年度からの繰越金	842,875
普通預金口座利子	4
総計	1,102,879

支出

項目	支出額
学会誌刊行・発送費	250,000
ホームページ関連費用	8,000
事務用品代・雑費	10,000
通信費(含振込手数料)	10,000
小計 1	278,000
【支部大会経費】	
学生アルバイト代	10,000
懇親会費用	
事務用品代・雑費	0
小計 2	10,000
2021 年度への繰越金	814,879
総計	1,102,879

(文責：松原文)

2022年度年次大会研究発表要旨

モルガーヌからマドワーズへ —『クラリスとラリス』における妖精像—

渡邊浩司 (中央大学)

アーサー王の異父姉妹にあたる妖精モルガーヌは、13世紀に古フランス語散文で書かれた物語群（『ランスロ本伝』、『アーサー王の死』、『続メルラン物語』など）の中では、「妖女」としての側面が強調されている。こうした悪しき属性を受け継ぐ妖精が、1270年頃の作と推測される『クラリスとラリス』に登場するマドワーズである。8音節詩句で3万行以上を数える作者不詳のこの物語では、ガスコーニュの宮廷で2人の若者クラリスとラリスが唯一無二の親友となり、試練の果てにアーサー王の知遇を得て、それぞれ意中の女性と結婚する。このように2つの婚姻物語からなる『クラリスとラリス』に前半から登場し、ラリスに対して一方的な恋愛感情を抱くのが妖精マドワーズである。

物語前半で、プロセリヤンドの森にあった妖精の谷へクラリスとともにやってきたラリスに一目惚れしたマドワーズは、物語の中盤から後半にか

けて、魔法を駆使して連れ去ったラリスに恋愛を強要しようとしたり、ラリスとマリーヌ（イヴァンの妹）との結婚を阻止しようとしたりする。物語での初出の時点では「美女」の姿で描かれていたマドワーズは、ラリスがマリーヌに恋心を抱くようになって以降は、語り手とラリス自身から「老女」（さらには「魔女」）呼ばわりされ、最終的にはラリスによって悪しき行動が続けられなくなってしまう。

しかしながら物語後半のマドワーズには、「妖女」とは別の側面も際立っている。最初の出会いのときにラリスの子を妊娠したマドワーズは、物語の最後では成長した息子をラリスの後継者にするべく、ラリスとマリーヌの結婚を阻止しようとして失敗に終わっているからである。この筋書きは、2021年度年次大会で取り上げた武勲詩『ロキフェールの戦い』の「アヴァロン・エピソード」と酷似している。そこでは妖精モルガーヌが、勇士レヌアールとの一夜の情事でもうけた息子コルボンの行く末を案じて、レヌアールと先妻の息子マイユフェールとの再会を阻止しようとして失敗に終わっているからである。このように『ロキフェールの戦い』の妖精モルガーヌと『クラリスとラリス』のマドワーズは、「妖女」であると同時に極端な母性愛を見せる両義的な妖精として、中世ヨーロッパ文学の中でも異彩を放っている。

シンポジウム

宮廷騎士文学の遊戯性の諸相

—恋愛奉仕のパロディー化を中心に—

13世紀において「古典期」の宮廷騎士文学が、時代の変化に伴いどのように内容的な変質を遂げていったのかを中心にディスカッションされた。発表にはドイツ文学とフランス文学の間の比較を通じて、それぞれの文化圏の気風・作風の違いが浮き彫りになった。婦人奉仕の理念・コード・マナーが13世紀を通じて次第にパロディー化されてゆく過程において、それぞれのnachklassisch（古典期を過ぎた）、もしくはパロディー的な作品を生

み出した詩人たちの内面性・精神活動・心理的態度はいかなるものであったのか、ということについて、発表者それぞれが作品の描写を検討しながら論じていった。中世後期にいたるエピゴーネといわれる作者たちは、仮に「古典期」の宮廷文学の理念・マナー・人物像を揶揄しているとしても、あるいはそのような教養を知らぬかのように振る舞い、更には名前を偽ったりしていても、随所に「古典的」な作品への当てこすり、更にはオマージュを示すことにより、反語的に自らの教養を匂わせている。それは作者としての「遊戯」であるが、背景には、宮廷文学理念のまじめな主張もまじめな反論も、最盛期の騎士社会においてこそ成り立ち得たのであり、もはや自分たちの世代において、そのような社会的熱気・統一感は存在しないというある種の諦念と共に、他方、むしろ軽やかな文化の担い手としての自負さえ垣間見える。そこでは作品の固有性へのこだわり、深刻さも失われている。パルチヴァルやクリエムヒルトのように、その人以外には代わりはおらず、その人の生死と共に「世界」の浮沈がかかっているような古典期作品の登場人物の固有性は、遊戯的なその後の時代の文学世界において相対化されてしまう。ロールプレイが中心コンセプトとなり、人物の描写は表面的なペルソナとなって、より類型化された喜劇的人物となり、代替可能な「劇」もしくは「プレイ」(Spiel, jeu)に過ぎなくなる。それは身分制社会の秩序の中で自らの分をわきまえ、その「役」を演じることを求められる都市市民の教化と娯楽を狙いとした「文学」であり、その背景に、文化の担い手が彼ら無名の都市市民層に移っていったということがある。

1. 『ヴィガロイス』における女性像

—古典期のアーサー王作品とその後継作品の比較

松原 文

ヴィルント・フォン・グラーフエンベルクの『ヴィガロイス』(～1220年頃)はフランス語の原典を持たず、古典期のドイツ語のアーサー王作品の要素を継承する作品である。ヴォルフラムの

影響がとくに指摘され、自らを学識あるマイスターではなく、詩を生業とする騎士とする点も共通する。本発表では女性像を先達作品と比較検討した。

庇護者を得るために美しさで魅せようとする女性、アーサー王宮廷に要求を突きつける賢明な女使者、異教徒だが貞淑性(triuwe)において称賛される女性、これらの背後にはハルトマンやヴォルフラムの描いた女性像が透けて見える。ただし女性が原因で騎士に危機が迫り、その解決のために異世界の衝突と再統合という拡大されたテーマまでが回収されていく先達作品にたいして、『ヴィガロイス』の女性のポジションはより受動的で、作品の構造はミネと名誉という図式に還元されえず、様々なモチーフが入れ替わり登場する。美しさと貞淑性はなお女性の属性として繰り返し認められているが、物語をモチベートする個の特質や偶発性には乏しく、誉れをもって冒険に挑む騎士のその時々必要に呼応して華を添える存在のように見える。

2. Tageliedのパロディーに見られる作者性

-Wolfram以降のミネザングを中心に-

伊藤亮平

本発表では、ヴォルフラム・フォン・エッセンバッハ以降の後期ミネザングにおけるターゲリートを概観しつつ、中世ドイツ抒情歌人の作者性を検討した。

ヴォルフラムは、ドイツ歌謡において「夜警」(wahter)を登場させることで、ターゲリートの新たな可能性を切り開いた。夜警の登場によって、夜警の独白、男性と夜警、女性と夜警、3人での会話など、様々なヴァリエーションを生み出すことが可能となり(Schweikle, 1995)、ターゲリートは作者の個性を發揮させやすいジャンルとなった。

さらに、ウルリヒ・フォン・リヒテンシュタインは『婦人奉仕(Fraudienst)』(1255年頃)において、身分の高い男女の逢瀬を夜警が手助けするのは不自然であるとして、夜警の代わりに侍女を登場させた。また13世紀後半のスイスで活動した

シュタインマルは、ターゲリートの舞台を宮廷から農村へと変更し、非宮廷化を図った。このように後期ミンネザングの歌人たちはただ伝統を踏襲するだけではなく、時にはその伝統を積極的に乗り越えようとすることで作者の存在を主張し、その様相はターゲリートに強く現れていることを本発表では指摘した。

3. パストゥレルにおける人間性と動物性

高名 康文

南仏と北仏のパスツレル（田園詩）では、奥方への愛を歌う宮廷風の叙情詩に恋愛奉仕の表現を叙情詩に借りながら、そこでは決して語られない欲望が、女羊飼いを対象として歌われている。騎士の娘への求愛が、受け入れられたり、断られて時に大恥をかくことになるというところにこのジャンルの詩の遊戯性がある。騎士は、宮廷詩のような言葉遣いで娘に呼びかけるが、作品の中には、つれなくされた騎士が娘を襲ったり、愛が受け入れられてもすぐに娘を捨てて去ってしまうというようなものもある。そのような作品は、一見、宮廷詩のパロディーのようにも見えるが、はたしでどうか？ 司祭アンドレの『愛について』では、農民は自然の衝動に突き動かされて愛の行為に駆られているだけの動物のような存在だから、騎士が思いを遂げるために節度を持った強制をすることは許されると書かれている。パスツレルにおける不作法な騎士の行いは、このような宮廷人の世界観そのものであり、パロディーに見られる価値転覆はないということになる。宮廷文学におけるパロディーを考える際には、パロディーに見えるところにパロディーがあるとは限らないということを考慮に入れる必要があるということだ。

4. 『ニーベルンゲンの歌』から『ヴォルムスの薔薇園』へ—クリエムヒルト像の変遷について

渡邊徳明

1200年代初頭に書かれた英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の「主人公」クリエムヒルトは、宮廷的で優美な貴婦人で、騎士道的な奉仕を受ける

誇り高い人物であり、愛する夫の仇を打つために一族をも滅ぼす。それに対し1250年代周辺に書かれた『ヴォルムスの薔薇園』は、このクリエムヒルトを批判しパロディー化し戯画的に描いている。ここで彼女はわがままな王女であるが、第一発表で提起された貴婦人の「打算」も、彼女の言動に見て取れる。『ニーベルンゲンの歌』では、クリエムヒルトが愛する夫に誠実な、心映え正しき宮廷貴婦人にも見えるので、彼女が見せる打算的な側面も夫への愛と誠実ゆえと許容される。ところが『ヴォルムスの薔薇園』では軽やかな筆致で、彼女は単に性悪な姫として一面的に戯画化される。本発表では、そのような戯画化の傾向がとりわけ強いこの叙事詩のAヴァージョンについて、2015年に出版された新しい校訂テキストに基づき、更に細かくその新旧の異本同士を比較して、婦人描写についての微妙なニュアンスの違いを論じた。

5. ヴィッテンヴィーラー『指輪』における農民と騎士

嶋崎啓

ハインリヒ・ヴィッテンヴィーラーの叙事詩『指輪』*Der Ring*（15世紀初頭）は宮廷騎士文学のパロディーとして愚かな農民たちを登場人物とする。ヒロインのメツリは異様な容姿をしているが、農民が愚か者の象徴として描かれることによる「冗談」である。一方『パルツィヴァール』のクンドリーエや、寓話作家のイソップが異様な容姿をしているのは高い知性とのギャップを示すためである。ただし、クンドリーエは魔女、メツリは農民、イソップは奴隷であり、皆周縁的存在である。

『指輪』にはナイトハルトという騎士も現れ、彼はミンネゼンガーの「農民の敵」ナイトハルト・フォン・ロイエンタールに由来しながら、のちの笑話で描かれるナイトハルト・フクスの先取りとして狡猾な狐という側面も持つ。作者も受容者も市民である『指輪』では農民だけでなく騎士も否定的に描かれる。

農民文学の先駆である『ヘルムブレヒト』では騎士になろうとして盗賊になり悲惨な最期を遂げ

る息子とそれを戒める父が描かれる。ここに現れているのは為政者にとって都合のよい旧来の価値観である。それに対し『指輪』の農民は粗暴ではあるが、そこには農民を通して表現される市民のエネルギーや新しい時代の社会的変動が反映されている。

II. 電子化について

国際アーサー王学会日本支部では、会員の皆様への連絡手段に、メーリングリスト等の電子媒体を活用しております。ただし、ご希望の方へは郵送での連絡を続けております。まだご回答いただいていない場合、事務局（office@arthuriana.jp）までご連絡くださいますようお願いいたします。

III. 学会メーリングリストについて

現在、学会員用メーリングリストは間接投稿とさせていただきます。投稿を希望する場合、まずは事務局まで文案をお知らせください。役員で確認後、配信いたします。

また、希望の方には日本支部よりメールアドレスを新規発行いたします。この件も事務局までご連絡ください。

IV. 会計からのお願い

2022年度分（ならびにそれ以前の未納分の）会費の納入をお願い申し上げます。会費は別送の「払込取扱票」にてお支払いいただくか、下記口座に直接お振込みください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部
ゆうちょ銀行口座番号：00250-6-41865

〈ゆうちょ銀行以外の金融機関からの振込み〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部
金融機関：ゆうちょ銀行（コード：9900）
店名：〇二九（ゼロニキュウ）店（店番：029）
預金種目：当座
口座番号：0041865

年会費は3,000円です。また新入会員の入会時には入会金3,000円を頂いております。新規入会希望者をご推挙いただく際には、希望者にその旨お伝えくださいますようお願いいたします。

日本支部では、一口1,000円からの寄付金を随時募集しております。ご寄付いただけます場合、「寄付〇口」とお書き添えの上、同封の払込票をご利用のうえ年会費とともにお振込みいただくか、直接口座にお振込みください。皆さまの温かいご支援をお待ち申し上げます。

【お知らせ】2019年度以降、当学会で進めている電子化に伴い、年会費納入もゆうちょ銀行口座への振込のみとなります。年次大会会場での現金納入はご遠慮いただけますよう、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。また、会費納入が5年連続して確認できなかった場合、退会扱いとさせていただきますのでご注意ください。

（会計：田中ちよ子）

V. 学会サイトについて

学会公式サイトでは、支部大会や国際大会のお知らせを掲載しております。

「アーサー王伝説解説」の項目では複数の記事の作成が進行中です。これまで多くの会員のご協力で、さまざまな作品やモチーフについて記事が蓄積されてまいりました。学会として確かな研究に基づいた情報を、今後さらにどのように発信していくとよいか、アイデアがありましたらお寄せください。

学会公式ツイッター（@inter_arthur_jp）でも随時情報の発信中。写本や映画、新刊などを幅広く紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

学会公式サイト

<http://arthuriana.jp/index.php>

学会公式ツイッター

https://twitter.com/inter_arthur_jp

（Web委員長：岡本広毅）

VI. 第37回年次大会について

第37回年次大会は対面とZoomのハイブリッド形式で開催されます。

(詳細は大会資料をご覧ください。)

日時：2023年12月9日（土）12:30 開会（開場
12:00）

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス独立館D403
Zoomも12:00より接続を開始します。

大会費：1,000円（学生会員無料）

懇親会費：6,000円（学生会員3,000円）

VII. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら庶務までお寄せください。シンポジウムは同年7月末、研究発表は同年8月末を締切とし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

VIII. 会員名簿に関するお願い

名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに庶務までお知らせください。なお会員に配布される名簿に関しては、一部の事項（所属・住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）を未掲載にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

IX. 天沢退二郎先生追悼

あまたい 天退さん追想

天沢退二郎さんの業績、特に聖盃探索のテーマやヴィヨンを中心とする中世文学研究と、そこで培われたテキスト・クリティックの技法を最大限に生かしたと思われる宮澤賢治研究。これらについて語るのには他にふさわしい方が何人もいらっしゃるだろう。だからここでは偏りを承知で個人的な思い出に触れたいと思う。

天沢退二郎さんの姿を初めて見たのは1969年4月だったか、5月だったか、文京公会堂（現文京シビックセンター）で開かれた集会の場だった。

集会というのは、正確なタイトルは忘れたが「造反教官報告会」という複数の大学教員による報告・講演会で、作品を読んで名前を知っていた高橋和己を最初にして最後に見たのもそのときだが、印象に残ったのは真紅のシャツでたしか薄い色のサングラスをかけて訥々と語っていた明治学院大の先生だった。話の内容は覚えていないし、二階席の奥から遠望していたので表情も分からなかったが、その強烈な視覚映像は強く記憶に刻まれた。やがてその人物が有名な詩誌『凶区』に依拠する詩人であり、さらには宮澤賢治研究の第一人者であることを教えられたが、フランス中世文学の専門家としての天沢さんを認識したのはずいぶんあとで、おそらく修士課程に進んでからだったと思う。

初めて言葉を交わしたのは1979年春、ポール・ズムツールが来日した時だった。国際文化会館での講演のあと、先輩方の雑談の場に紛れ込んでいて、当時日本未公開だったエリック・ロメールの『ペルスヴァル・ル・ガロワ』が話題になった時、うっかり「パリで見ました」と口走ったところ、天沢さんから鋭い質問が立て続けに飛んできて、芝居を映画で見せられるとつまらないな、としか受けとめていなかった私はほとんど立ち往生したのだった。大修館の『フランス文学講座』第一巻に収められた「物語の変質Ⅰ 中世における探索の主題」をこっそり授業のタネ本に使ったのもその頃だった。

そして天沢さんから中世文学研究の後輩として認知してもらえるようになったのは1980年代の前半、アーサー王学会日本支部に加盟を許された頃だと思う。けれども支部総会以外ではなかなかお目にかかる機会が無く、言葉を交わす場面になると宮澤賢治の話ばかりしていたような気がする。「聖盃」やヴィヨンのことをもっともっとうかがっておけばよかったとつくづく思う。

悔やまれることは数々あるが、天沢さんとのおつきあいで自慢したいのは、何がきっかけかよく分からないが、ある時から御自身の詩の読者として認めてくださっていたと思われることだ。1999

年の『悪魔祓いのために』以来、読売文学賞を受けた『幽明偶輪歌』を経て『南天お鶴の狩暮らし』まで、ほとんどすべての詩集をいただき、朗読会のお招きも何度か受けた。昨年夏の『アマタイ句帳』が最後になってしまったが、この本の企画・編集がすべてマリ林さんの手になるものであることが微笑ましくも悲しい。

今年2月5日夜、天沢さんの写真は黄色と青のウクライナ・カラーの花々に包まれていた。真紅のシャツの写真なら三原色だな、と場違いなことを考えていた私を、彼は「しょうがないヤツだな」と片頬で笑っていたことだろう。

(篠田 勝英)

X. 文献情報

ここには、当学会会員であるか否かに関わらず、国内で出版されたものを中心に西洋中世文学関連の刊行物を紹介しています。

英文学（書誌担当：吉久保肇子）

<研究（単行本）>

Williams, Oliver 『アーサー王伝説の全容 イギリス人が日本語で語る解説 ～アルトリア・ペンドラゴンの生涯とは～』（研究出版）Kindle版、2023年、48p.

高宮 利行 『西洋書物史への扉』（岩波書店）、2023年、222p.

不破有理 『「アーサー王物語」に憑かれた人々—19世紀英国の印刷出版文化と読者—』（慶應義塾大学教養研究センター選書）、2023年、148p. ISBN978-4-7664-2887-2

<研究（雑誌・研究紀要等）>

岡本広毅 「〈ガウェイン・カントリー〉の継承と発展—『忘れられた巨人』への着想源—」、『立命館文学』第683号、2023年、pp. 165-181.

Okamoto, Hiroki, "Sir Gawain and the Green Knight in Malory's Template: 'Finding Time for Romance' in Modern Arthuriana." *POETICA: An International Journal of Linguistic-Literary Studies*, no. 97&98, 2023, pp. 55-72.

岡本広毅 「英語のルーツとファンタジー文化」、『多文化理解のための国際英語文化入門』ウエルズ恵子編（丸善出版）、2022年、pp.14-28.

小川公代 「文学における怒り—アーサー王伝説から『進撃の巨人』まで」、『文藝 夏季号』（河出書房新社）、2022年、pp.134-146.

TAKAGI, Masako, "Cadwaladr's Prophecy upon Henry Tudor: 'but as a Conquerour come forth thy self,'" *POETICA: An International Journal of Linguistic-Literary Studies*, no. 97&98, 2023, pp. 1-27.

FUWA, Yuri, "Making Malory 'readable' in the Victorian period: Frederick James Furnivall and Sir Edward Strachey", *POETICA: An International Journal of Linguistic-Literary Studies*, no. 95&96, 2021, pp. 105-123.

FUWA, Yuri, "Title Matters: From William Caxton to Joseph Haslewood; colophons, titles, and editions of Malory's Morte Darthur", *POETICA: An International Journal of Linguistic-Literary Studies*, no. 97&98, 2023, pp. 73-104.

不破有理 「『アーサー王の死』（1816年）の印刷者 Robert Wilks—未刊行資料から伝記的再構築の試み（その1）」、『慶應義塾大学日吉紀要英語英米文学』、74号（2021年）、pp. 1-42.

不破有理 「『アーサー王の死』（1816年）の印刷者 Robert Wilks—未刊行資料から伝記的再構築の試み（その2）」、『慶應義塾大学日吉紀要英語英米文学』、77号（2023年3月）、pp. 95-141.

松井倫子 「第III部 チョーサーの時代と文化 11. 歴史・時代背景」『チョーサー巡礼—古典の遺産と中世の新しい息吹に導かれて—』（悠書館）、池上忠弘 [企画] 狩野晃一 [編]、2022年、pp. 295-385.

<翻訳>

ジョーゼフ・キャンベル（斎藤 伸治 訳）『聖杯の神話: アーサー王神話の魔法と謎』（人文書院）、2023年、370p.

J・R・R・トールキン（山本史郎 訳）『サー・ガウェインと緑の騎士 普及版: トールキンのアーサー王物語』（原書房）、2022年、258p.

ニール・フィリップ (岡本広毅 訳) 『ガウエイ
ン卿の物語—アーサー王円卓騎士の回想』
(みずき書林)、160p.

ジェームズ・J・ウォルシュ (Andalus
Publications 訳) 『医学の作り手たち (翻
訳) : 中世における医学に関連する科学の生徒
と教師の物語』 (Independently published)、
2023年、301p.

パトリシア・ラヴェット (安形麻理 訳、高宮
利行 監修) 『カリグラフィーのすべて 西洋
装飾写本の伝統と美』 (グラフィック社)、
2022年、224p.

<その他>

*招待講演

高木眞佐子「写真で見るイギリス・ロンドンと
オックスフォード—伝統と変化」杏林大学公開
講演会 (三鷹ネットワーク大学共催) 2022
年11月12日 Zoom オンライン開催

<https://www.mitaka-univ.org/kouza/C2251800>

*シンポジウム

司会・講師 慶應義塾大学教授 不破有理、講師
慶應義塾大学教授 徳永聡子、講師 杏林大学
教授 高木眞佐子、講師 福岡女子大学名誉教
授 向井剛、コメンテーター デ・モントフォー
ト大学上級講師 加藤 蒼子「サー・トマス・マ
ロリー『アーサー王の死』のテキスト変容—印
刷・出版・読者の視点から眺める500年の
歴史—」シンポジウム第5部門、日本英文学会第
94回大会 2022年5月21日 Zoom オンライン
開催

[https://www.elsj.org/meeting/Proceedings/94.h
tml](https://www.elsj.org/meeting/Proceedings/94.html)

独文・北欧文学 (書誌担当: 伊藤亮平)

<研究(単行本)>

金子哲太『ドイツ語古典文法入門』(白水社)、
2023年、320p.

鈴木桂子『ヒルデガルト・フォン・ビンゲン: 幻
視の世界、写本の挿絵』(中央公論美術出
版)、2022年、637p.

<研究(雑誌・研究紀要等)>

Koda, Yoshiki „Tugend und Glück : zum
Habituskonzept bei Aristoteles und Meister

Eckhart “.『藝文研究』(慶應義塾大学藝文
学会) 121号、2021年、pp. 80-95.

Tatsuo TERADA/Sonja KERTH „Erganzen,
Auslassen, Kontaminieren Die Einstellung
von Weltchronik-Bearbeitern gegenüber
ihren Quellen am Beispiel Heinrichs von
München : mit einem Blick auf den Umgang
mit Heldensage und Heldendichtung “.『メ
ディア・コミュニケーション研究』(北海道大
学大学院メディア・コミュニケーション研究
院) 76号、2023年、pp. 21-51.

三佐川亮宏 「大公ハインリヒと黄金の首飾り:
ヴィドゥキント『ザクセン人の事績』第一巻二
二章を読む」、『東海大学紀要 文学部』(東海
大学文学部) 113号、2023年、pp. 83-108.

森下勇矢 「愚と罪源の構造: 『パルチヴァー
ル』の「tumpheit」にみる罪の様相」、
『詩・言語』(東京大学大学院ドイツ語ドイツ
文学研究会) 90号、2022年、pp.1-18.

渡邊徳明 「中世以来の愛にまつわる「不気味な
もの」の伝統: 人間の「物化」に対するフロイ
ト的な恐怖」、『リュンコイス』(日本大学桜
門ドイツ文学会) 56号、2023年、pp. 1-22.

<研究書の翻訳>

K. ヴァスマンスドル (楠戸一彦編訳) 『ドイツ中
世後期のスポーツ』(溪水社)、2023年、180p.

<書評>

都筑真「書評 K. ヴァスマンスドル著、楠戸一彦
編訳『ドイツ中世後期のスポーツ』」、『体育
史研究』(体育史学会編集委員会学会事務局)
40号、2023年、pp. 87-90.

北欧文学

<研究(単行本)>

谷口 幸男 / 小澤 実『ルーン文字研究序説』(八坂
書房)、2022年、310p.

仏文学 (書誌担当: 川口陽子)

<研究(単行本)>

上山益己『中世盛期北フランスの諸侯権力』(大
阪大学出版会)、2021年、338p.

EGAWA, Atsushi, SMITH, Marc H, TANABE, Megumi, WIJSMAN, Hanoi Willem (dir.), *Horizons médiévaux d'Orient et d'Occident : regards croisés entre France et Japon*, Éditions de la Sorbonne, coll. « Histoire ancienne et médiévale », 2022, 350p.

江川温、マルク・スミス、田邊めぐみ、ハンノ・ウェイスマン（共編）『東西中世のさまざまな地平－フランスと日本の交差するまなざし－』（知泉書館）、2020年、390p.

高名康文『『狐物語』とその後継模倣作におけるパロディーと風刺』（春風社）、2023年、416 p.

渡辺節夫『国王証書とフランス中世』（知泉書館、知泉学術叢書19）、2022年、664p.

<研究（雑誌・研究紀要等）>

江川温「これからの西欧中世史研究のために：一二世紀以前のフランス中世史研究の視点からの提言」、『鷹陵史学』（鷹陵史学会）47号、2021年、pp. 5-23.

岡田真知夫 ブログサイト ISLE D'AVALON
<<http://mac-okada.cocolog-nifty.com/blog/>> に掲載した記事。[]内は掲載日。

<『メリアドール』の Virelay 10> [2022.11.3]
－ヴィルレという詩形式の解説と歌詞の解釈の試み。

<1 イングランド里は 2.0~2.5km だった>
[2023.1.20]

－デュ・カンジュの中世ラテン語辞典に依る計算法。流布版『散文トリスタン』（TLF 叢書巻3, ルシノ校訂）の後注。

<ガルオはランスロのベッドに潜り込んだのか？>
[2023.5.25]

－ミシャ版『ランスロ』LIIa, 63, 5-6 の解釈。読者の「妄想」を呼びやすい登場人物の行動。

<「一体誰がここまでしてもらえるでしょうか？」> [2023.5.30]

－同上 LIIa, 69, 7 で主人公が吐いている台詞の訳しかた。

小川定義「Quant plus … tant plus から plus … plus へ：中世フランス語の比較相関文と左周辺」、『人文学報』（東京都立大学人文科学研究科人文学報編集委員会）516号、2020年、pp. 35-93.

治部千波「中世ヨーロッパにおける料理の視覚的發展－医学書と料理書にみるブラン・マンジェを中心として－」、『会誌食文化研究』（一般社団法人日本家政学会 食文化研究部会）17(0)号、2021年、pp. 14-26.

片山幹生「文学的寓意としての中世ハーブ－ギョーム・ド・マシヨール『ハーブの賦（ディ）』読解」、『ETUDES FRANÇAISE = 早稲田フランス語フランス文学論集』（早稲田大学文学部フランス文学研究室）30号、2023年、pp. 20-34.

金沢百枝「フランス中世の写本挿絵とロマネスク彫刻：ヨーロッパの古層の遠いこだま」、*Art anthropology*（多摩美術大学芸術人類学研究所）17号、2022年、pp. 4-14.

黒岩三恵「聖バルバラ崇敬と図像(1)：フランスにおける聖女崇敬の成立と展開（11世紀～16世紀）」、『ことば・文化・コミュニケーション：異文化コミュニケーション学部紀要』（立教大学異文化コミュニケーション学部）14号、2022年、pp. 1-37.

小池寿子「中世フランス王権のイメージ形成：聖王ルイの事績と奇蹟を中心に」、『國學院雑誌』（國學院大学）123(11)号、2022年、pp. 1-27.

SETO, Naohiko, " La relecture de la dernière pastourelle de Guiraut Riquier (PC 248, 15) : une amibiguïté volontaire", in *Revue d'Études d'Oc*, t. 176, 2023, pp. 137-165.

千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第101回 ストーリーは道徳主義から逃げられない。」、『ハヤカワミステリマガジン』2022年11月(755)号、2022年、pp. 244-247.

千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第102回 文学作品は大喜利への回答である。」、『ハヤカワミステリマガジン』2023年1月(756)号、2023年、pp. 174-177.

千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第103回 挿話累積構造の物語が「憂き世」のパノラマを展開する。」、『ハヤカワミステリマガジン』2023年3月(757)号、2023年、pp. 174-177.

千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 第104回 エピソード累積型の物語 vs プロット駆動型の物語。」、『ハヤカワミステリマガジン』2023年5月(758)号、2023年、pp. 238-241.

千野帽子「幻談の骨法 世界一簡単な幻想・小説論 最終回 文学作品を自己啓発本として読む。」、『ハヤカワミステリマガジン』2023年7月(759)号、2023年、pp. 258-261.

[千野帽子は、仏文学者、岩松正洋・関西学院大学商学部教授のペンネーム]

田邊めぐみ「祈りのあとさき：『アンヌ・ド・ブルターニュの大時禱書』をめぐって」、Stella (九州大学フランス語フランス文学研究会) 40号、2021年、pp. 103-125.

MIYASHITA, Takuya, « Notes sur le vocabulaire des Lettres à Lucilius en français médiéval », 『仏文研究』(京都大学フランス語学フランス文学研究会) 第53号、2022年、p. 50-20.

宮松浩憲「中世フランス・イタリアの「食人種」たち」、『経済社会研究』(久留米大学経済社会研究会) 62(1-2)号、2022年、pp. 179-192.

渡邊浩司「「伝記物語」の変容(その5) — 『クラリスとラリス』をめぐって 『仏語仏文学研究』(中央大学) 55号、2023年、pp. 1-41.

渡辺節夫「フランス中世における令状 (mandement) の成立と諸特徴および機能に関する一考察」、『青山史学』(青山学院大学文学部史学研究室) 41号、2023年、pp. 1-17.

渡辺節夫「シャンパーニュ伯と中世フランス王権：ティボー4世(1222-1253年)の伯位継承と伯領統治」、『青山史学』(青山学院大学文学部史学研究室) 38号、2020年、pp. 13-35.

<研究書の翻訳>

パトリック・コルベ(堀越宏一編集・翻訳)『中世ヨーロッパの妃たち』(山川出版社、

YAMAKAWA LECTURES 10)、2021年、2021p.

ジョルジュ・デュビイ(金尾健美訳)『中世ヨーロッパの社会秩序』(知泉書館、知泉学術叢書25)、2023年、684p.

フィリップ・ヴァルテール(渡邊浩司訳)『クレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』に隠された民話—国際民話話型カタログ ATU では何番にあたるのか?』(中央大学人文科学研究所)、人文研ブックレット42、2023年、45p.

<翻訳>

有田豊(訳)「中世ヴァルド派詩編『舟』」『立命館言語文化研究』(立命館大学国際言語文化研究所) 34巻1号、2022年7月、pp. 175-195.

フィリップ・ヴァルテール(渡邊浩司・渡邊裕美子訳)「鷲鳥と豚—ケルト文化圏の異界の食べ物(1)」『中央評論』(中央大学) 74巻3号(通巻第321号)、2022年、pp. 108-124.

フィリップ・ヴァルテール(渡邊浩司・渡邊裕美子訳)「鷲鳥と豚—ケルト文化圏の異界の食べ物(2)」、『中央評論』(中央大学) 74巻4号(通巻第322号)、2023年、pp. 93-102.

コリンヌ・ピエールヴィル(渡邊浩司訳)「『クラリスとラリス』」『仏語仏文学研究』(中央大学) 55号、2023年、pp.157-168.

コリンヌ・ピエールヴィル(渡邊浩司・渡邊裕美子訳)「リュネット—さまざまな顔を持った女性(クレティアン・ド・トロワ作『ライオンを連れた騎士』より)」『中央評論』(中央大学) 75巻2号(通巻第324号)、2023年、pp.97-107.

クリスティーヌ・フェルランパン=アシェ(渡邊浩司・渡邊裕美子訳)「『アルテュス・ド・ブルターニュ』—知られざる中世末期フランスのアーサー王物語」『中央評論』(中央大学) 75巻1号(通巻第323号)、2023年、pp.96-110.

宮下拓也・中西志門(共訳)「フランコ・イタリアン武勲詩『シャルルマーニュの遺言』—試訳—」『仏文研究』(京都大学フランス語学フラ

ンス文学研究会) 第 53 号、2022 年、
p.159-201.

<その他>

* 書評

大浜聖香子「書評 上山益己著『中世盛期北フランスの諸侯権力』」、『西洋史学論集』(九州西洋史学会) 59 号、2022 年、pp. 32-36.

佐藤猛「書評 上山益己著『中世盛期北フランスの諸侯権力』」、『西洋史学』(日本西洋史学会) 274 号、2022 年、pp. 192-194.

妙遊「本の紹介 フィリップ・ヴァルテール著、渡邊浩司・渡邊裕美子訳『英雄の神話的諸相—ユーラシア神話試論 I—』(2019)」『中央評論』(中央大学) 75 巻 2 号、2023 年、pp. 156-164.

山田雅彦「新刊紹介 渡辺節夫著『国王証書とフランス中世』」、『西洋史学論集』(九州西洋史学会) 60 号、2023 年、pp. 96-99.

渡邊浩司「書評：『ケルト神話・伝承事典』木村正俊著、論創社、2022 年」『中央評論』(中央大学) 74 巻 4 号(通巻第 322 号)、2023 年、pp. 151-155.

渡邊浩司「書評：『「ゴネストロップの大釜」の図像分析試論』ベルナル・ロブロー著、デュノワ協会、2021 年」、『中央評論』(中央大学) 75 巻 1 号(通巻第 323 号)、2023 年、pp. 150-155.

* コラム

フランス語教育歴史文法派(有田豊・ヴェスィエール、ジョルジュ・片山幹生・高名康文)「歴史で謎解き!フランス語文法」 「ことばのコラ

ム」(三省堂辞書ウェブ編集部) 34-40, 2022.4-6; 8; 10; 12, 2023.5 (現在も連載中)

<[https://dictionary.sanseido-](https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/columncat/言語/歴史で謎解き!フランス語文法)

[publ.co.jp/columncat/言語/歴史で謎解き!フランス語文法](https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/columncat/言語/歴史で謎解き!フランス語文法) (歴史で謎解き!フランス語文法 | 三省堂 WORD-WISE WEB -Dictionaries & Beyond-) >

中世ラテン文学・イタリア文学・その他

<研究(単行本)>

神崎忠昭『新版 ヨーロッパの中世』(慶應義塾大学出版会)、2022 年、480p.

神崎忠昭・長谷部史彦(著・編集)『地中海圏都市の活力と変貌』(慶應義塾大学出版会)、2021 年、332p.

<研究(雑誌・研究紀要等)>

阪上眞千子「ヨーロッパ中世における内縁・事実婚の法的処遇：イタリアの例」、『阪大法学』(大阪大学大学院法学研究科) 71(3・4)号、2021 年、pp. 913-934.

白川太郎「イタリア中世宗教史研究における「女性の信仰生活」：Vita religiosa al femminile (secoli XIII-XIV), Roma: Viella, 2019)」、『立教大学：立教大学大学院文学研究科史学研究室紀要』5 号、2022 年、pp. 42-74.

宮下規久朗「美術とパンデミック」、『学術の動向』(公益財団法人 日本学術協財財団) 26(12)号、2021 年、pp. 12_58-12_62.

編集・発行

国際アーサー王学会日本支部事務局

〒520-2194

滋賀県大津市瀬田大江町1-5

龍谷大学社会学部 嶋崎陽一研究室内

Email: office@arthuriana.jp

メンバーリスト：members@ml.arthuriana.jp

学会ウェブサイト：<http://www.arthuriana.jp/index.php>